

〔課題演習報告〕

学級の高まりを感じるボール運動領域の指導法の研究 —集団で取り組む体育科のアクティブラーニングの試み—

那 須 賢 将

Kensho NASU

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻教育実践力開発コース
(2017年1月6日受理)

本研究は、児童が学級の高まりを感じることができるようにするための指導の方法について探ることを目的としたものである。そのために、ボール運動領域において、アクティブラーニングを用いた授業を実施し、アンケート調査や児童の記述、話し合い活動の際の言動に注目して考察した。実践Ⅰ、Ⅱ、Ⅲでティーボールを題材とし、3つの方法を実施した。その結果、体育科の学習の中で学級としての高まりを感じることができたというアンケート結果や記述が見られるなど、指導の方向性が見いだせた。

キーワード：学級の高まり、アクティブラーニング、ボール運動、焦点化

1 はじめに

(1) 研究の背景

今日の問題として人間関係の希薄化が挙げられる。実際に私の3度の実習の経験からも、同一の趣味をもっている子供や幼少期からの交友関係がある子供とだけ話をしたり、コミュニケーションを取ったりする場面が多々見受けられた。現在の子どもたちは普段生活している学級の中での人間関係が偏ったものであることが考えられる。原因として、核家族化による家庭での会話の減少や地域とのつながりの低下といったものが挙げられる。また、SNSの普及等による会話の減少も一要因として挙げられる。そして、学校現場においても、会話の減少、コミュニケーション能力の低下等の問題が増加している。これらのことから、現在の児童は学級という集団に対して、意識が薄くなっている傾向がある。それは、授業においても、自分ができれば良いという考えをもった児童が増え、学級として高まろうと考える児童が減少していることになる。そこで、児童が学級の高まりを感じることができるような授業づくりが求められると考える。

体育科においては、小学校学習指導要領解説(体

育編)の目標に、仲良くや協力など仲間関係を重視することが記載されている。また、松本(2003)は、教育活動としての体育授業が、子どもたちの成長や生き方、豊かな生活に貢献できることとして、①子どもの体力問題への貢献、②達成感・自己有能感の体験、③運動や学習方法の理解、④仲間の関わりへの貢献の4つの内容として、示すことができると述べている。また、本研究では体育科の教材の中でも、ボール運動領域を取り上げて実践を行っていく。ボール運動はコミュニケーションが必要であり、チームで協力して練習をしたり、ルールや作戦を工夫したりして、集団対集団の攻防によって競争することを楽しさや喜びを味わうことができるという特徴がある。そのため、本領域の学習はコミュニケーション能力の低下等の問題改善を含めて、効果的に作用し、児童が学級の高まりを感じることができると考える。

2 研究の目的と方法

(1) 研究の目的

学校現場での人間関係の希薄化に対して、体育科の学習(ボール運動領域)を通して児童が学級の高まりを感じることのできるような授業をめざし、実践を行った。

を解決する学習過程」の典型的な学習過程を示している。また、高田（2015）によれば、子どもが自ら学習課題を解決しようとするためには、「楽しく運動を行う」ように仕組むことで、「もっと上手になりたい」や、「友達に勝ちたい」等、課題に対する関心や、課題を解決しようとする意欲を高めることが求められ、教師が運動を工夫することが求められると述べている。そのため、教師は単に授業を行えば良いというものではなく、簡易化したルールを示す等して、いかに子どもの意欲を高めるかが重要になる。さらに、高田（2015）は器械運動や陸上運動など、個人の課題が学習の中心となる領域と、ボール運動や表現運動のように、集団の課題が学習と深くかかわってくる領域では、一様ではないとも述べている。そこで、本研究で扱う集団の課題発見・解決の学習過程を高田（2015）が示した学習過程を基に筆者が作成し、図2に示している。

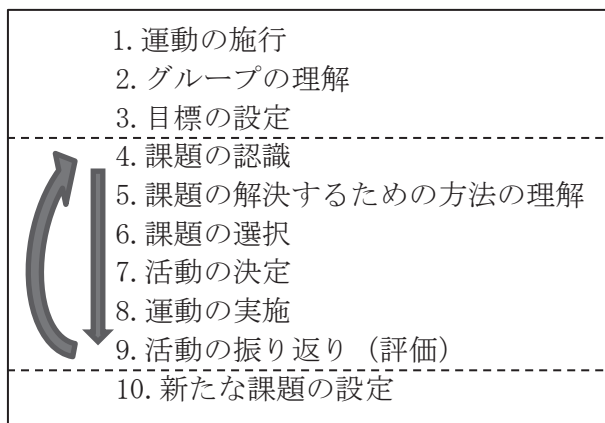


図2 授業展開例
(高橋《2003》を参考に筆者が作成)

(4) 体育と学級について

高橋（2003）は、体育授業と学級経営の間にプラスの関係が確認され、体育授業のみが学級集団意識の好転に作用したとは断言できないものの、体育授業を基軸に授業が展開された対象学級は、学級集団意識が好転したと述べている。さらに、その際の子どもたちからみた学級集団意識としては「学習意欲」、「人間関係」、「活動性」、「雰囲気」という4つの観点から、捉えることができると示している（高橋，2003）。また、松本（2003）は明確な課題、課題の達成に向けてグループで取り組むことで、より集団での達成の満足感が得られると述べている。これらのように、これまで体育の授業と学級集団の関係においては多くの研究が行われてきた。そこで本研究では、より学級集団の

意識を向上させるために、深い学びにつながり、集団での達成感を味わうことができるアクティブラーニング(課題の発見・解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習方法)は効果的であると考ええる。

4 実践を踏まえた提案

(1) 教材と授業の意図

本実践では、ティーボールでの授業実践を行った。ティーボールは、作戦などチームの考えた動きが即時に場面や点数として表れる。そのため、作戦づくりなどの学習の過程において、学習者一人ひとりの考えが活かされやすく、自信や学級の高まりを感じることに有効であると考ええる。

ここで、取り上げるティーボールのもつ教材としての魅力は以下のようなものが挙げられる。

① 技能的に簡易である

動くボールを打つソフトボールに比べて、ボールをティーに置いた状態で打つティーボールは、多くの児童がバットでボールを捉えることができる。そのため、どの児童でも得点に貢献することができる。実践校の児童の実態としても、ベースボール型に対する苦手意識として、動いているボールを足やバットで捉えることができないと答える児童が多数みられた。また、ティーボールに必要な打つ動きや走る・投げる・捕るなどの他の動きも比較的容易である。そのため、ティーボールは集団で課題発見・解決していくための基本となる意欲をもたせるものとしては、効果的であると考ええる。

② 作戦が実行しやすい

ティーボールは、ゴール型やネット型に比べて、チームの作戦が実行しやすいと考える。ゴール型やネット型はゲームの中で、攻守の切り替えが絶えず行われるため、チームの作戦を実行することが困難である。これに対し、ティーボールは攻守交代制であるため、攻撃側・守備側でそれぞれ作戦を立てることができ、実行することができる。また、攻撃側・守備側で課題を発見することができるため、よりチームの課題が明確になると考える。

③ 成果が明確である

進塁や得点を獲得することができるかどうかで、作戦がうまくいったのか、チームの練習方法は適切であったのかが明確になる。そのため、課題を解決したり、新たな課題の発見に効果的であると考ええる。

④ 学級の高まりを感じることに効果的である

ボール運動領域の教材に共通して、作戦を立てたり、チームの練習を決定したりする際に、チームでの話し合いが基になる。そのため、課題を解決した時に集団で達成感を味わうことができ、学級の高まりを感じるために効果的であると考え。

(2) 単元計画

本研究における単元計画は表1に示す通りである。単元の導入段階では、まず簡易化したゲームを行い、チームで目標を設定し、達成するための課題を発見し、解決していくための方法を見つけていく。展開段階では、集団をチームに絞り、チームでの話し合いを中心にして、練習方法や作戦を決めていく。ルールについては、展開部分で子どもの実態に応じて、変更してもよいものとする。本研究で最も重要となるのは展開の部分である。単元を通して、前述したように子どもたち主体で授業を進めていく。

表1 単元計画例

次 時	学習活動と内容
一 1 時間	1. 試しのゲーム (1) 簡易化したルールで試しのゲームを行う。 2. 単元の目標設定 (1) チームとしての能力を把握する。 (2) チームの目標を決める。
二 4 時間	1. チームで話し合い、チームの作戦づくりや練習方法の決定 (1) チームの目標を達成するための課題を見つける。 (2) それぞれの課題を解決するための練習方法や作戦例を把握する。 (3) チームでどの課題に取り組むか決め、実践する。 (4) ゲームで試してみ、振り返りをする。 ※これらの流れで繰り返し行う。
三 1 時間	1. 学習の成果を発揮するゲームを行う。 (1) これまでの学習を踏まえた上で、作戦を立てる。 (2) リーグ戦を行う。

(3) 1 単位時間における授業実践例

表2は授業実践をティーボールの単元の中のチームで練習・作戦を考えるという展開部分を取り上げて示したものである。以下では、授業を具体的に説明する。1. 運動の施行として、前時までの振り返りも含めた上で、ゲームを行う。2. グループの理解として、ゲームを通して、個人の能力、チームとしての能力を把握する。3. 目標の設定として、一人ひとりが全員の能力等を把握した上で、グループの目標を設定する。展開部分では、まず4. 課題の認識として、グループの目標を達成する

表2 1 単位時間の授業例

	主な学習活動	位置付け
導 入	1 準備運動	1. 運動の施行
	2 ゲームの実践	2. グループの理解
	3 チームの能力を捉えること	3. 目標の設定
	4 チームで目標の決定	4. 課題の認識
展 開	5 目標を達成するための課題を考え必要な作戦や練習方法を考えること	5. 課題を解決するための方法の理解
	6 チームで決定した作戦や練習方法の実践	6. 課題の選択
		7. 活動の決定
		8. 運動の実施
終 末	7 チームで本時の振り返り	9. 活動の振り返り(評価)
		10. 新たな課題の設定

ための課題を話し合い、確認する。そして5. 課題を解決するための方法の理解として、それぞれの課題に対して、どのような練習を行ったり、作戦を立てたりすればよいのか話し合い、解決策を検討する。6. 課題の選択、7. 活動の決定として、チームで練習方法を決めたり、作戦を立てたりする。自分たちの課題に合った練習方法や作戦を集団決定させる。8. 運動の実施として、練習方法を決定した場合は、その練習を通して、身につけたものをゲームで活かすことができるか、ゲームで実践する。また、作戦を立てた場合も同様に、ゲームで実践する。そして9. 振り返り(評価)として、再度話し合いを設け、ゲームをする中で、自分たちの選択した練習方法や作戦が適切であったのか確認する。10. 新たな課題の設定として、次にチームで新たな課題を選択し、取り組む。また、9. 振り返りの際に、運動が効果的でなかった場合には選択した練習方法を自分たちのチームに合った練習方法に改善したりする。自らグループの課題を把握したうえで、練習方法や作戦を立て、ゲームで達成することができたときに、集団での満足感を味わうことができると考える。

授業を行っていく際の留意点として、運動時間の確保が挙げられる。体育の授業において、運動時間の確保は重要な課題である。グループで課題の発見・解決していくためには、話し合う場を設定することと、子どもの十分な運動時間を確保することなどのバランスと、深い学びにつなげるた

めに、子どもの思考が止まってしまうようにするタイミングを考えることが重要である。

(4) 調査方法

高橋（2003）の学級集団意識調査と体育授業評価の2つアンケート調査を用いて行った。具体的には、単元前後に授業出席児童に16項目の調査票と20項目の調査票に記入させ、「はい」を3点、「どちらでもない」を2点、「いいえ」を1点として、平均的を算出した。また、毎回の授業で学習プリントに考えを記入させ、その記述についての考察や話し合い活動における児童の言動を基に考察を行った。

4-1 実践Ⅰの実際と考察

(1) 授業の概要

単元名「ティーボール」

- ① 対象 宗像市立小学校 第6学年 40名
- ② 実施時期 平成28年10月 全6時間
- ③ 単元計画(表3)

表3 実践Ⅰ単元計画

次	時	学習活動と内容
一 (1)	1 / 6	1. 試しのゲーム (1)簡易化したルールでのゲーム 2. 単元の目標設定 (1)チームの能力の把握 (2)チームの目標設定
	二 (4) 5 / 6	1. チームで話し合い、練習方法や作戦の決定 (1)目標を達成するための課題の発見 (2)課題を解決するための練習方法や作戦例の把握 (3)チームで選択、実践 (4)振り返り ※(1)に戻る
三 (1)	6 / 6	1. 学習の成果を発揮するゲーム (1)まとめのゲーム

④ 授業の特徴

- I 集団での課題発見・解決学習を取り入れた単元を構成し、授業を実施する。
- II 話し合いの促進やチームの高まりを実感できるようにするために作戦シートを活用する。

(2) 成果と課題及び改善策

【成果】

本実践においては、上記の単元計画の流れで授業実践を行った。筆者が第1次の1時目、第2次2時目、3時目の授業実践を行った。その他の授業

は担任教師が指導案を基に展開した。

成果として、本単元の授業実践においては、作戦シートを活用することで、児童の話し合いが活発に行われた。通常の授業の中では、ホワイトボードを取り入れることがあると考えられるが、今回の実践の中では、記録として積み重ねていくために、画用紙で作成した作戦シートを単元を通してファイリングし、話し合いのツールとして用いた。こうすることで、チームとしてどのように高まっていったのか見取ることができたと考える。

【課題及び改善策】

課題として、より深い議論を行わせていくために、問いを焦点化することが必要であると考えた。単にチームでの話し合いを行わせても、チームによって内容のばらつきが見られた。そこで、今後の改善授業の中では、目標や作戦をチームで考えさせる際にも、具体的な場面を設定させて、話し合いを行わせていくことで、より深い学びになると考えた。つまり、3 先行研究の(2)で述べた教師の焦点化が重要である。また、今回の授業実践においては、実践校の都合上、他の単元と並行しての実践であったため、児童の思考が他の単元と混在してしまうことが起きてしまった。これを踏まえ、今後の実践の改善策として、授業前までに前時の活動を振り返らせる支援が必要となる。

4-2 実践Ⅱの実際と考察

(1) 授業の概要

単元名「ティーボール」

- ① 対象 北九州市立小学校 第5学年 32名
- ② 実施時期 平成28年11月～12月
- ③ 単元計画(表4)

表4 実践Ⅱ単元計画

次	時	学習活動と内容
一 (1)	1 / 6	1. 試しのゲームをする (1)簡易化したルールでのゲーム (2)教師の焦点化した課題提示
	二 (4) 5 / 6	1. 設定された場面について考え練習や作戦を立てゲームに活かす (1)目標を達成するための課題の発見 (2)課題を解決するための練習方法や作戦例の把握 (3)チームで選択、実践 (4)振り返り ※(1)に戻る
三 (1)	6 / 6	1. 学習の成果を発揮するゲーム (1)まとめのゲーム

④ 授業の特徴

I 攻撃面に焦点化する。(ランナー1 塁, 2 塁の場面提示)

II 児童の思考をつなぐための手立てを行う。

(2) 成果と課題及び改善策

【成果】

本実践においては、上記したような単元計画の流れで授業実践を行っていった。本実践においては、筆者が単元を通して授業を実践した。

本実践においては、ティーボールの攻撃面に焦点を絞って授業展開を行ったことで、「打つ」ことにおける技能の向上が見られた。図3のb児の学習プリントの記述をみると、技能の高まりを感じることができたという児童の記述を見ることができた。また、チーム全体として技能が向上したという記述やチーム内の個人の名前を挙げての技能の向上や態度に関する記述を見ることができたことから、児童がチームとして高まっていったことを感じ取ることができていたと考える。その要因としては、焦点化したことで児童がどこに目を向ければ良いのかが明確になったことが挙げられる。

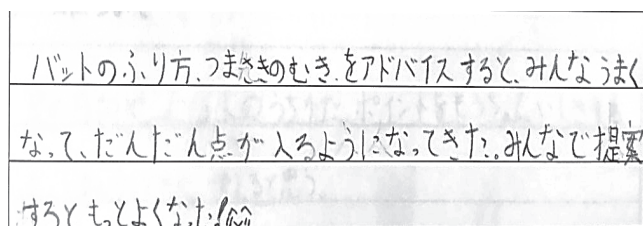


図3 b児の学習プリント

【課題及び改善策】

単元前と単元後の学級集団意識の調査と体育授業の調査では、表5,6に示す通りの結果となった。表からも分かるように、向上がみられなかった。

学級集団意識の調査から下降した児童の学習プリントを分析してみると、場面について詳しく理解できていないことが見えてきた。本実践で、教師が問いを焦点化し、ランナーが1 塁と2 塁の場面を示したが、十分に理解できていない記述が見られた。そこで、今後の実践の改善策として、より深い議論にしていくために、第1時の段階で、ティーボールに関する知識を児童に理解させることが重要であると考えた。具体的には、どのようにして点が入るのか、どのようにしてアウトになるのかなどの基本的なルールを理解させるために、モデリングして具体的に示すなどが考えられる。

表5 学級集団意識調査

学級集団意識	単元前	単元後	増減
雰囲気	2.60	2.60	±0
活動性	2.24	2.01	-0.23
学習意欲	2.4	2.42	+0.02
人間関係	2.67	2.19	-0.48
総合評価	2.48	2.30	-0.18

表6 体育授業の調査

体育授業調査	事前	事後	増減
たのしみ	2.67	2.53	-0.14
できる	2.36	2.28	-0.08
まなぶ	2.39	2.33	-0.06
まもる	2.76	2.73	-0.03
総合評価	2.55	2.47	-0.08

また、低下した項目に目を向けてみると、人間関係に関することが大きく低下していることがわかる。人間関係の項目に体育授業で最も関係しているのは、まもるという項目である。体育授業調査において、まもる項目は他の項目に比べて、減少があまり見られない。しかし、分析してみるとチームによって、増減の幅が大きいことがわかった。下降した児童のチームの授業の様子を筆者が見て感じたこととして、チーム内でルールに関することの言い争いが見られたり、教え合う活動が活発でなかったという状況があった。向上した児童の記述には、みんなでルールを守ってできていた、教えてもらってできるようになったというものが多く見られた。また、図3のb児の記述のように、チーム内でみんなが意見を出し合ったことで、高まりを感じている児童もいる。このことから、下降した児童のチームに対して、チームの約束事を徹底させること、教え合いを促進する教師の声掛けが必要になると考える。また、一人の意見だけでなく、多くの児童が意見を出せるようにするための話し合いにすることが必要になる。

4-3 実践Ⅲの実際と考察

(1) 授業の概要

単元名 「ティーボール」

- ① 対象 北九州市立小学校 第5学年 33名
 ② 実施時期 平成28年11月～12月
 ③ 単元計画(表7)

表7 実践Ⅲ単元計画

次	時	学習活動と内容
一 (1)	1 / 6	1. 試しのゲーム (1) 運動に関する知識・理解 (2) 簡易化したルールでのゲーム
二 (4)	2 / 5 / 6	1. 設定された場面について考え練習や 作戦を立てゲームに活かす (1) 目標を達成するための課題の発見 (2) 課題を解決するための練習方法や 作戦例の把握 (3) チームで選択, 実践 (4) 振り返り ※(1)に戻る
三 (1)	1 / 6	1. 学習の成果を発揮するゲーム (1) まとめのゲーム

④ 授業の特徴

I モデリングを用いて基本的なルールを理解させる。

II チームの教え合いを促進する教師の声掛けを行う。

(2) 成果

【成果】

実践Ⅱの改善策として挙げていたティーボールの基本的な知識の理解を促したことにより, より多くの児童が話し合いに参加することができるようになり, チームが全体として高まっていったことを実感することにつながったと考える。図4のa児の学習プリントからも分かるように, 野球経験者がいないチームにおいても, 打つことに関する技能の高まりを感じることができるようになったと考える。また, この記述だけでなく, 野球未経験者の児童の学習プリントの記述の中に, ○○の場面においては, ○○の方向へ打てばよいとチームで考えることができたようになったという記述も見られた。このことから, 思考判断の面に関しても, 児童が高まりを感じることができるようになったと考える。本実践における学級集団意識調査と体育授業に関する調査においては, 表8と表9のアンケート調査の結果からも向上が見られた。この結果から全てとはいえないものの本単元の授業は児童が学級の高まりを感じることにつな

私のチームは野球をしている人がいなくて最初はみんな
 どもあまりかかていなかったけど足をむける方向やバットの
 かなをみんなでお話し合っとても上手になれたのでうれしかった。

図4 a児の学習プリント

がったと考える。

また2点目の改善策として, チームの教え合いを促進する教師の声掛けを挙げていたが, それにより学級集団意識調査の人間関係の項目において, 向上が見られたと考える。本実践における学習プリントからは, 図4のa児の学習プリントに記述してある教え合っなどの人間関係に関わる記述の割合が増加していた。

表8 学級集団意識調査

学級集団意識	単元前	単元後	増減
雰囲気	2.70	2.74	+0.04
活動性	2.32	2.41	+0.09
学習意欲	2.44	2.55	+0.11
人間関係	2.17	2.28	+0.11
総合評価	2.41	2.49	+0.08

表9 体育授業の調査

体育授業調査	事前	事後	増減
たのしみ	2.69	2.78	+0.09
できる	2.46	2.53	+0.07
まなぶ	2.41	2.50	+0.09
まもる	2.76	2.80	+0.04
総合評価	2.58	2.65	+0.07

【課題及び改善策】

本実践の課題として, 前述したように学級としてアンケート結果は上昇したものの, 下降した児童がいることである。下降した児童の記述から, 自分がチームに貢献できていない, チームの役に立てなかった, 活躍できなかったという記述が見られた。これは, 自分がアウトになったことのみが目が向いてしまい, その児童がアウトになった

ことでチームに点数が入った要因となっていることを認識できていないということである。そのための改善策として、そのような考えをもった児童に対して、点が入った要因を考えさせる場をチームで設定することが必要になる。そうすることで、児童はチームに貢献できたという達成感を味わうことができる。また、他の児童においても、チームとして点を取ることができたという達成感が強くなり、より高まりが見られるのではないかと考える。

5 研究の成果と課題

【成果】

本研究を通して、体育の授業と学級には、関わりがあることが改めてわかった。また、体育の授業によって児童がチームでの達成感を味わうことで、学級の高まりを感じることができるようになった。さらに、単に話し合いを行わせるのではなく、教師が焦点化した問いを投げかけることで、より深い学びになる。

【課題】

本研究を通して、3 先行研究の(3)で示した児童が学級の高まりを感じることのできる授業展開例の改善点が見えてきた。図5はその授業展開例を示したものである。改善を加えた部分としては、1. 運動に関する知識・理解を促すことである。教師が焦点化した課題を提示しても、児童の運動に対する知識・理解がなければ、話し合いを設定しても、ベースボール型の経験者などある一定の児童のみ思考が働いている状態に陥ってしまう。その結果、4-2 実践Ⅱの実際と考察の実践のように、

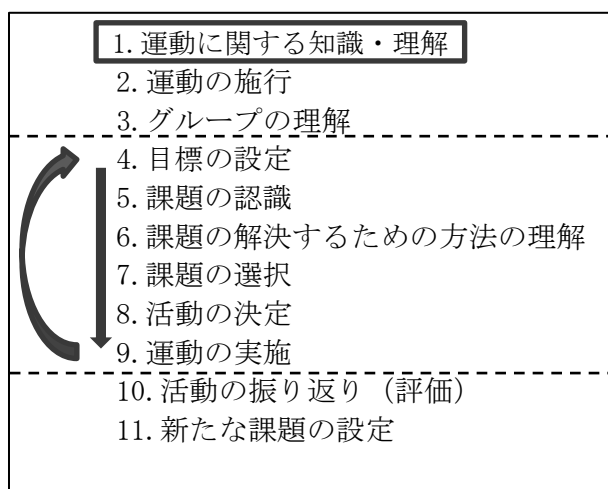


図5 改善した授業構想図

理解していない児童は理解できていないまま動いていることになり、学級としての高まりを感じることができていないことがわかった。

また、授業の展開例に加えて教師が授業において、焦点化した課題提示や声掛け、作戦シートの活用など、どのような手立てを実践すれば効果的であるかもわかった。その反面、4-3 実践Ⅲにおいて、一部の高まっていない児童が見られた。その要因として、自分がチームに貢献できていないと感じていることがわかった。このことを踏まえ、今後はそのような児童に活躍できている、チームの役立っていると感じさせる授業を実践していきたい。

6 おわりに

本研究では、ボール運動領域において児童が学級の高まりを感じることができるよう授業づくりを目的として研究を進めてきた。その結果、5 研究の成果と課題で挙げたような授業が有効であることがわかった。また、それに加え、より児童が学級の高まりを感じるための授業の中での手立てもわかった。本実践においては、ボール運動領域という集団の課題が学習に深くかかわっていた単元であった。今後は、陸上運動や器械運動など個人の課題が学習に深くかかわってくる単元においても、体育授業を通して学級が高まり、児童がそのことを感じることができるよう授業実践を行い、研究を深めていきたい。

主な引用・参考文献

- 細越淳二 2015 『「よい体育授業と学級の成長」 体育科教育研究と実践の架け橋になる月刊専門誌』 大修館書店
- 文部科学省 2012 中央教育審議会 初等中等教育分科会 教育課程部会(第44回(第3期第30回))議事録・配付資料
- 文部科学省 2008 小学校学習指導要領解説体育編 松本格之祐 2003 仲間の関わりの育成に着目した小学校体育授業の事例的研究
- 岡野昇 2015 『「アクティブラーニングは体育の学びをどう変えようとしているのか」 体育科教育研と実践の架け橋になる月刊』 大修館書店 pp. 16-19
- 高橋健夫 2003 『体育授業を観察評価する ―授業改善のためのオーセンティック・アセスメント』 明和出版 pp. 8-11, pp. 24-26
- 高田彬成 2015 『「こどもと体育」アクティブラーニングで何を・どのように学ぶのかの充実』 光文書院 pp. 20-23